


 書評

油井邦雄，相良洋子，加茂登志子 編

実践・女性精神医学

ライフサイクル・ホルモン・性差

小澤寛樹

本年度の精神神経学会において，女性のメンタルヘルスケアについてのワークショップに参加し，その後本書を手にとることになった。ワークショップではフロアの女性外来に従事する医療者からの発言が絶えず，さまざまな年代，診療科の立場からの意見が交錯した。女性外来の多くは行政からの Top to Down の形で設立されている経緯があり，程度の差はあるものの，女性，または男性精神科医師として，患者が女性のみと特化された外来で，時に政策絡みの諸問題のある分野に取り組むことへの戸惑いや苦悩が多く出されていた。本書はそういった女性のメンタルヘルスケアに従事する医療者を含め，最近広がりを見せている女性専門外来にかかわる医療者，あるいは将来この分野の医療を志す学生に推薦できる一冊である。

章立てはライフサイクルごとに，女性に起こり得る変化の提示で構成されていて，全章において豊富な文献の引用の下に，性差医療の観点から身体疾患，脳機能の男女間の差について生物学的に検討されている。また多くの図説と，具体的な症例の提示があり，現場で働く医療者にとって，女性のメンタルヘルスケアを包括的に学びたいというニーズを満たすものであり，また必要な時に調べることができる辞書的な役割も十分に果たしてくれる一冊と考える。

本書では現代の 10 代の女性の性意識，女性の暴力被害の問題，就労する女性が罹患する精神障害，不妊に伴う心理的な葛藤，月経前後の気分障害，更年期障害と身体表現性障害，老年

期女性の心性などの事項が取り上げられ，各年代の女性たちの問題にかかわり続けてきた専門家によって，実感のこもった解説がなされている。従来の精神医学的な見方からは困難事例として考えられてきた症例も多い。これらは女性の問題であると同時に，医療や社会の狭間で今まで十分な援助が得られなかった人々の問題であるとも感じられた。薬物依存症の項からの引用であるが「程度の差こそあれ，女性の薬物依存者は現代社会のさまざまなパワーゲームの被害者としての面を持っている」。薬物依存にかかわらず，社会的に入り組んだ立場に立たされた女性たちが抱える症状は，男性を含む社会全体のひずみを反映したものにとらえることもできる。

冒頭で述べたワークショップの議論は，医療提供側の医師の葛藤へと向かっていった。「女性外来は単なる専門外来の一つのはずであったが，そこで展開されたのは，人間性がむき出しになった個人と個人の対話の場」という，このワークショップ座長であり，本書の編者でもある油井邦雄先生の言葉もあった。本書が契機となり女性の医療の登場で，はじめて明らかになった従来の医療の間隙への議論が今後も続くことを期待する。

(長崎大学医学部精神神経科)

● B5 400頁 2005 定価8,400円(本体8,000円+税) 創造出版